HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	東日本大震災被災地における サービス・ラーニングと異文化間理解その（２） ： 仮設住宅におけるサロン活動を通じた学生たちの学び
Author(s)	齋藤, 眞宏
Description	異文化間教育学会 第34回大会 2013年6月8日(土) 日本大学
Issue Date	2013-07-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52878
Type	conference presentation
File Information	saitoumasahiro20130626.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

東日本大震災被災地における サービス・ラーニングと異文化間理解 その（2）

仮設住宅におけるサロン活動を通じた学生たちの学び

異文化間教育学会第34回大会
2013年6月8日（日本大学）
旭川大学　齋藤　眞宏
Tel:0166-48-3121（内線504）
E-mail: saitoum@live.asahikawa-u.ac.jp

はじめに：講義から見える学生たちの姿から

- 「本質的差異」を元にした，他者に対する「負わされたアイデンティティ」（井上，p.94）を無批判に受容し，それを行使する。（e.g. 被災者）
- 自分に対する「負わされたアイデンティティ」を無批判に受容し，行使する。
- 自分に対する「負わされたアイデンティティ」との葛藤に苦しむ。

→エンパワーメントとしての学習の模索

学習とは「人間」について問うことであり，自らの「生き方」について問うこと

1.文化と学習

- 本研究における「文化」の概念：所属する多様・多彩なコミュニティの成員として，他者との相互作用の中で，人間が獲得・享受・再構築した複合的産物

「私たちがいう『文化』の概念には，ものごとの意味の根源に立ち返り，ものごとを再吟味し，味わいなおし，『新たな文化の作り手』として世界と関わるという実践（それが「文化的実践」である）がいとなまれているのが前提になっているのである。しかもそのようないとなみ（文化的実践）は，絶えず問い直され，修正され，より広い社会との関係の網目がつむぎだされていくものなのである。そのような共同的ないとなみとその産物こそが文化なのである。」（佐伯，p.30）

2. エンパワーメントとしての参加

エンパワメントの存在を確認できるのは，人びとが，自分たちが能力と権利をもち，自分の周りの環境に対して影響を及ぼすことができると信念をもっているときである。（略）（エンパワメントは）目標から発生し，また，目標に貢献するものである。つまり両方がお互いに支え合い，達成を促すのである。（Lee, pp.73–4）

「参加」:「個人的な『自分探し』のいとなみでありながら，同時にきわめて社会的な，人びととの共同的ないとなみに，自らのユニークな『自分らしさ』を生かしながら，『加わっていく』いとなみ」（佐伯，pp.30–31）

3．エンパワーメントのためのコミュニティの組織化の目的

コミュニティワークは参加する個人の自己効力感を獲得しつつ，以下を獲得する目標を有する（Lee,pp.63–70）。

① 市民の関与もしくは参加：他者との関わり，環境にプラスの変化，市民としての権利と責任

② コミュニティ感覚：自分達への肯定的な感覚，共通体験，文化，つながり

③ 組織の開発：組織の結束，構造化された活動，社会的認知

④ 具体的な利益もしくは資源：基本的資源，達成感

⑤ 社会に関する学習：組織的，社会的スキル，制度に関する知識，社会的・政治的分析

4. サービス・ラーニング実践の視点①

- 学校であろうと大学であろうと、通常のカリキュラムの外に、活動を通じて価値観、社会的や感情的能力、自己認識、自己効力感を発展させる機会は提供されるべきである。（Goh, Heong, D’ Rozario, Mun, p.２）
- すべての経験的な学習と同様にサービス・ラーニングは効果的に教授することはできない。コミュニティに関わっていく過程の中で、コミュニティのニーズを理解し、そのニーズを満たす方法を探求しながら学ぶものだからだ。（Goh, Heong, D’ Rozario, Mun, p.1 ）

4.サービス・ラーニング実践の視点②（Shumer, pp.23-4）

- 学生たちにとってやりがいのある課題であること
- 活動の集中度と期間
- 学生たちが重要な決定をすること
- 周囲の大人の興味・関心
- 学生たちの興味・関心を探究する自由の保障
- 多様な課題
- 学生たちが一定の責任を負うこと
- 教室での学びへの応用
- リフレクション
- 活動経験に対する十分なリフレクション
- 一定期間以上の継続的な経験
- コーチング／支援をしてくれる個人の存在

5. 実践を志向した異文化間教育

① 文化間にまたがる人間，事象を取り上げる。
② 人間形成，人間の発達に焦点をあてる。
③ 複数の文化間の接触，相互作用と，その結果生じる葛藤や統合に焦点を当てる。
④ 関係性の組み替えを目指す。

（佐藤，横田，吉谷. pp.23–24）

6. 震災ボランティアサークルの顧問としての視点

学生の成長

- 個人の探究（自己尊重と他者尊重）
- 個人の形成と発展（人間的，市民的，職業的発展）

活動の継続

- その場の多様性への意識
- 関係性の変容への意識
- 誠実さ
- 規範の脱構築

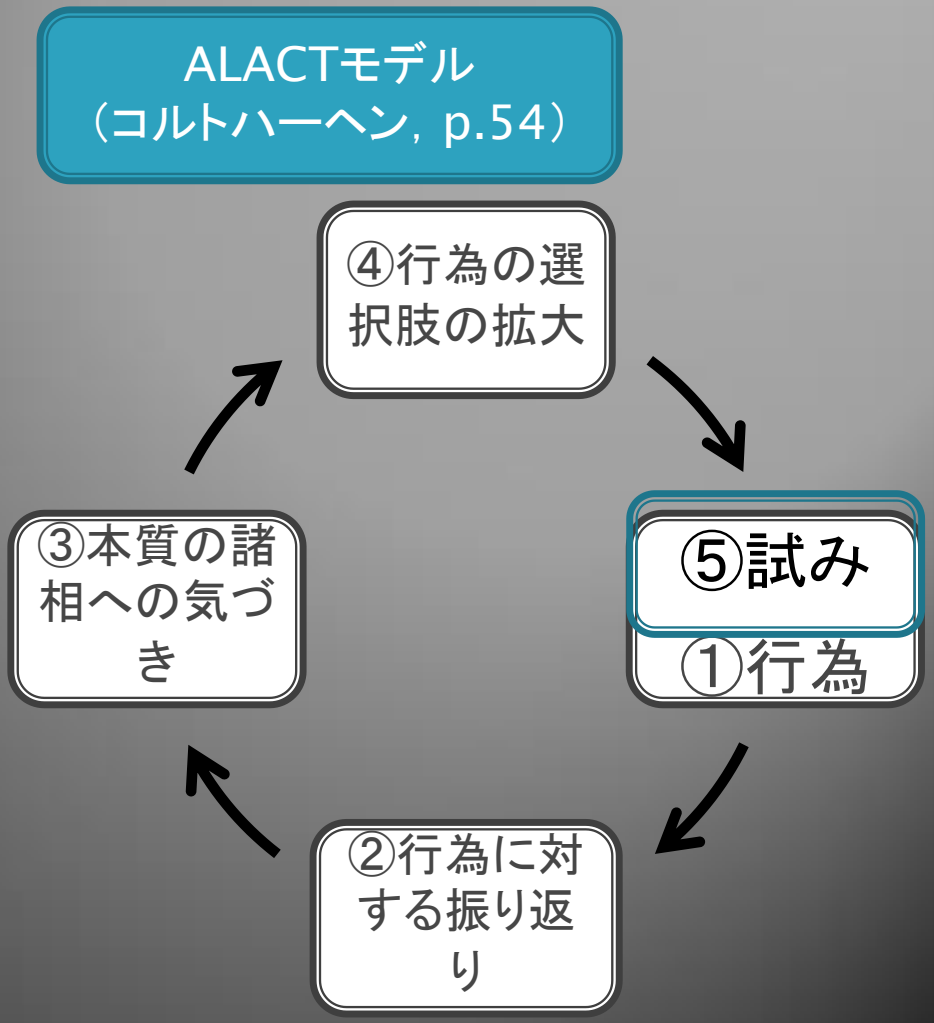
活動の充実

- 情報の共有
- 適材適所：皆が活躍できる組織へ
- 無理のない活動内容の選択と実践

リフレクション

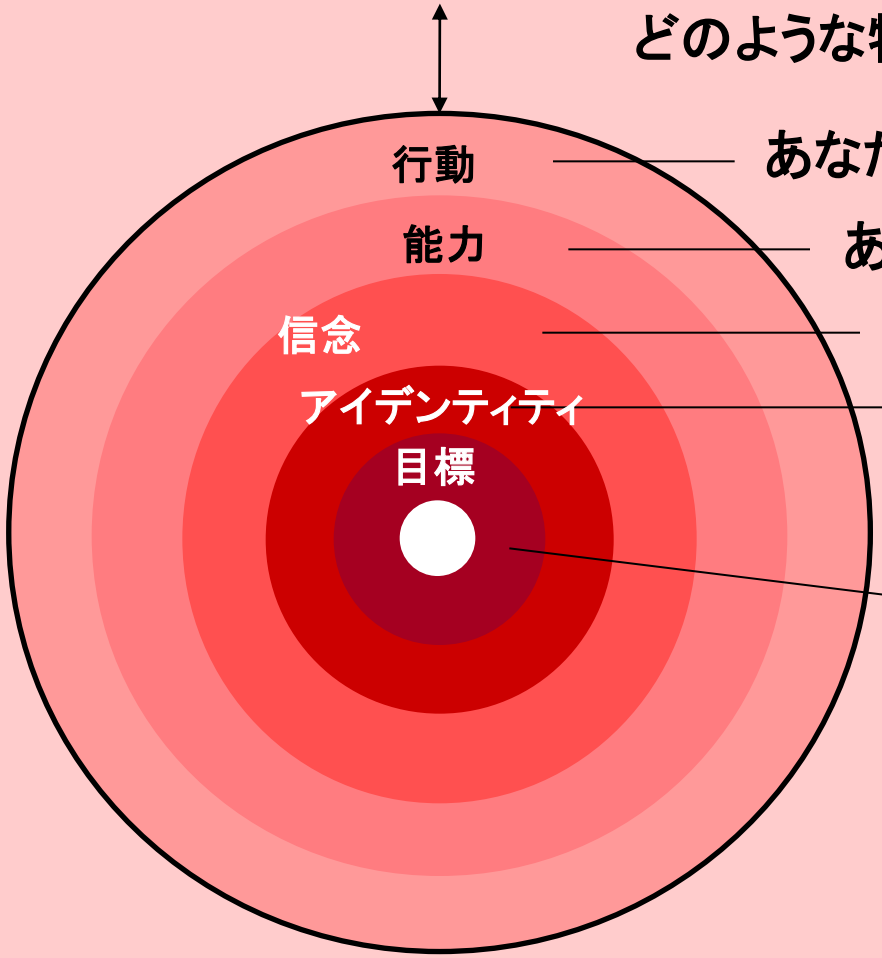
7. サービス・ラーニングとリフレクション

省察の過程はサービスラーニングにおける核となる要素である。構造化された省察は，学習者が行為や経験を分析するための良い機会である。それは自分の価値観や意見や考え，仮説や判断，実践の形成を可能にし，さらには学習者のより深い理解，その後の活動における意味や意義の構築につながっていく。（National service learning clear house, 2005）



Levels in reflection(Onion model)

(Korthagen & Vasalos, 2005, p.54; Korthagen & Vasalos, 2010, p.5)



あなたが対応しなければいけないのは，
どのような物事？（あなたに影響を与えるものとは？）

あなたは何をする？

あなたは何ができる？

あなたは何を信じている？

あなたは何者？（……としての
自分自身の役割をどう考える？）

どうしてあなたは今ここにいる？
（あなたの理想，目標とは？）

（山辺恵理子訳）

8. 研究方法

① 活動後に行われるリフレクションのための反省会
② 個別指導
③ フィールド・ノート
④ コミュニケーション・カード
⑤ 学生たちの作成した各報告書（学内外発表会）
⑥ 毎日の活動終了後に，宮古市社会福祉協議会に提出した学生たちの活動報告書

9. 2012年度活動概要

① 現地における活動（2012年秋および2013年春　計2回　述べ7日間）

② 石巻焼きそば、大槌町手作りキーホルダー／ストラップの販売，被災地の情報提供（学園祭）

③ 事前学習会（2回）

④ 活動準備：食事会、健康体操、歌（演歌、童謡）

⑤ 事後学習及び発表会

- 旭川ウエルビーイングコンソーシアム（AWBC）発表会（2013年3月9日）
- 学内ゼミ活動発表会（2013年3月13日）
- 上川町立上川中学校総合学習支援（2013年4月18日）
- 北海道上川高校「国際ボランティア」（2013年5月20日）

※「授業実践演習」の実習の一環

10. 被災地入りする学生たちの思い

- 人と人とのつながりを感じたい。
- 大学で学んだこと（民法、看護、教職）を生かしたい。
- 自分を見つめて、一人ひとりが変われるきっかけにしたい。（3年教職）
- 何のためのボランティアなのか、そもそもボランティアは必要なのか？（4年看護）

- 「今は震災の話はしない。当時もあまり深くはしなかった」（1年　看護）
- 「当時はよく話をしていたが、今はTVで見たら少し話すぐらい」（2年　福祉）

成長／学びへの期待

被災地への自分自身も含めた周囲の無関心とそれへの疑問

11. 仮設住宅における活動について

（課題）

住民同士のつながりを創るために、ボランティアで何らかの企画を持ってきてほしい。社会福祉協議会は場所を提供する。

（事前ミーティングにおける注意事項）

- 活動時間：10：00–15：00
- 住人の生活リズムを崩さない。
- ゴミは自分たちで持ち帰る。
- 住民の独自の活動がある場合は尊重してほしい。
- 体を動かすプログラムなどを企画してほしい。

12. ある仮設住宅でのエピソード①

ある学生（1年看護）の経験から

談話室に来てくださった高齢の女性とお話をしていた。最初はさをり織りなどの他愛のない話だった。突然会話が尽きて間が空いた。その時は何となく秋の暖かい日差しが談話室の窓から差し込んでいて、仲の良い友達といる感じだった。間が空いてもいいかなと思って休んでいたら、すると突然，彼女が「震災のときはね・・」と言って自分が被災した時の状況について詳しく話し始めた。

12. ある仮設住宅でのエピソード②

【内容】

（震災前は）宮古市田老地区に住んでおり，知り合いはすべて家も何もかも流された。比較的高台にあった自分の家も流された。屋根を震災前日に直したばかりだった。

「大切なものこそ流されてしまったんだよね。」

「（震災から1年半たつが）海を見るのが嫌です。」

「今だに堤防の向こう（海側）に行くことはできません。」

「週に2～3回，『故郷』（『』は発表者の付けたし）の田老にある自宅の家庭菜園に野菜を育てに行っています。」

「津波の被害をうけた人とうけていない人は分かり合えない。」

12. ある仮設住宅でのエピソード③

学生たちの疑問:「なぜわざわざつらい話をしてくれたのか？」

（反省会での意見）

- 対応した学生が信用を得た。
- 震災のことを覚えていてもらいたいという思い。
- もやもやしたものを吐き出した。
- わからない。

「実際に震災を体験していない私にとっては想像ができず，お話を聴いてもなんと返答したらよいのかわからなかった。」（学生たちの活動報告資料から）

12. ある仮設住宅でのエピソード④

学生（1年看護）の振り返り

①沈黙は「意味のあるもの」だった。

沈黙はただ気まずいものではなくて，女性と学生の双方が相手を気遣って考えている意味のある時間だった。

②聞く姿勢が大切である。

あなたの話を真剣に聴いているという姿勢で相手の話を聴くことによりその思いが伝わった。

Ex：相手の方に体を向け目をみて話を聴く。

12. ある仮設住宅でのエピソード⑤

学生（1年看護）の気づき:「その人を見ること」「共感的態度」

① 「被災者」ではなくその人を見ることの大切さ

私たちと「被災者」の方々が分かり合うのは大変難しいことだが，「被災者」同士の間でもその被害に応じて分かり合うのは困難である。そのため，（実は事前学習でも学んでいたが）「被災者」の方々を「被災者」として一括りに見てはならず，「〇〇さん」として見ることが大切ということを再認識した。

12. ある仮設住宅でのエピソード⑥

② わかろうとして聴くことが大切であり、看護学でいう共感的態度である。

わかったふりをして「そうですね」というのはその言葉はとても軽薄なものになる。実際，話をしてくれている人たちはそのようなことを望んでいるのではなくて話を自分のこととして聴こうとする真摯な態度を望んでいる。

「わかることではなく，わかろうとすることこそ重要」（学生のコメントから）

13. 2012年度活動をめぐる環境変化①

- ボランティア数の減少→活動に対するニーズ、ディマンドが高くなる。また活動内容や手際の悪さに対する不満も聞かれた。
- 仮設住宅における生活が長期化するとともに起こる人間関係における葛藤や対立への戸惑い（近隣住民、社会福祉協議会、仮設住宅住民間）

13. 2012年度活動をめぐる環境変化②

- 活動を継続していることに対する評価（住民の方々の気配り、岩手日報の報道、FM宮古「旭川大学の皆さん、頑張ってください」）
- 当初から活動してきた仮設住宅では、住民の方々と学生との人間関係が深まる。
- 震災当時の話を聴く機会が増えた。:「もう一度津波が来ても逃げない」「（おもちゃをすべてリュックに詰めているのは）大切なものをすべて津波に流されたから」
- 学生たちの意識の中に「べき論」→学生間の意識差が顕在化

参考　岩手県宮古市VC受け入れ人数

（岩手県社協ボランティア・市民活動センター, 2012. http://www.iwate-svc.jp/）

2011年度		
10月		1,027
最大	18日	119
最少	28日	6
平均（人/日）		33
2月		546
最大	29日	44
最少	20日	8
平均（人/日）		18.8

2012年度		
10月		411
最大	23日	27
最少	19日	6
平均（人/日）		13.3
2月		304
最大	9日	22
最少	6,8,17,22日	6
平均（人/日）		10.85

13. 考察:2011年度の学生たちの学び

① 自己の探究:無力感から自分と向かい合う
② 自己効力感の獲得:達成感、「やればできる」
③ 自己形成と発展:失敗から学び成長を実感する
④ 他者に向かい合う:怖さ、気配り、さまざまな思い、感謝
⑤ 探究を通した「その場」への働きかけの創出
⑥ 自分たちの活動の発展:ボランティア観／事前準備／継続性
⑦ 社会への批判:被災者寄りの視点／偏った震災報道／震災を忘れていく社会に対する批判
⑧ 日常生活や将来の職業へのつながり:リテラシー／看護や福祉の学生としての意識／東北への思い

13. 考察:2012年度の学生たちの学び①

- 自己効力感／達成感:「自分は小さい存在かもしれないが無力ではない」という意識

「聴くだけで相手のためになれる」「高齢の方をはじめ皆、きさくで良い方だった。別れるのがつらかった・・・すごく感情移入をしてしまって。ボランティアとしてきた人としてこういうことで良いのかと思いました」（2年経済）⇔「行く意味はあったのか」（1年看護）「多くの人と関わり合っていなかったから充実していなかった」（1年看護）

- ボランティア観の深化

「復興ってなんだろう？物が立ったから復興？人の気持ちが少し明るくなったから復興？復興の意味が分からなくなった。（略）ボランティアってなんなんだろう，ということを復興とは何だろうということにからめながら考えていくのが必要だと思いました。」（1年看護）

13. 考察:2012年度の学生たちの学び②

- ボランティア観の「脱構築」

「3月13日(学内発表会)が終わってから、もう考えたくなくて逃げるように旭川を出た」「ボランティアについてもう考えたくはない」⇔「ボランティアとして現地入りする以上、きちんと活動しないと」(1年看護)

- 傾聴に対する観の深化→職業意識へ

「聴く姿勢が大事だと思った。目を見て話す、相槌をうつ、どのタイミングでとか難しかった。ただうなずいているだけでは失礼なので『そうなんですか』と言ったのは良かった」(1年看護)「感情移入をして相手の気持ちになって話を聴く。完全に相手の状況を理解できなくても努力することが大切」(2年経済)

14. 考察　2011～12年度の学生たちの学びの比較

- 他者に向かい合った過程および結果として、自己効力感、達成感の獲得（2011年度の①～④）
- ボランティア観の深化
- 傾聴活動の深まり→職業意識へ
- 探求を通したその場への働きかけ
- 事前準備／継続性
- 社会認識
- リテラシー／東北への思い

強まった／深まった学びの項目

目立たなかった／薄まった学びの項目

15. まとめ①

① 2011年度と異なる点は参加した学生の中で、活動の意義を肯定的に捉える学生と、それほどの意義を感じない学生に分かれることである。その理由として2011年度とは異なる周囲の被災地に対する無関心、時に冷ややかな反応の中で、自己効力感や達成感を求めて被災地入りした。2011年度においては「行くこと」だけで周囲の評価を得ることができた。

② 自分自身を生かして活動した結果として、被災地の誰かと密な人間関係を作ることができた学生は、自己効力感や「具体的な利益もしくは資源」（Lee, pp.68–9）としての達成感を獲得した。

15. まとめ②

③ ②のような経験をした学生たちは、ボランティアとして自分がどうあるべきかを考えて「コミュニティ感覚」（Lee, pp.65-67）の一部と言えるボランティア観を深化させ、その方法として「社会的スキル」（Lee, p.69）としての傾聴を重視し、傾聴活動について自分の言葉で表現するまで学びを深めた。

④ その他の学生たちにとっては、けして過小に評価をしたり、否定するものではないが「一つの人生経験」としての活動である。学びを積み重ねていくうちに、いつかこの経験を役立てることを期待している。

参考文献①

- Goh, K.C., D'Rozario, V., Heong, A.C.T., Mun, C.H. (2009). Character development through service and experimental learning. Singapore: Prentice Hall
- 井上達夫.(2003).『普遍の再生』.岩波書店.
- 岩手県社協ボランティア・市民活動センターホームページ.(2013).「明日へ進もう！ ！いわて」 http://www.iwate-svc.jp/(アクセス日2013年5月31日)
- Korthagen, F.A.J. & Vasalos, A. (2005). Levels in reflection: Core reflection as a means to enhance professional growth. *Teachers and teaching: Theory and practice,* 11(1), 47-71.

参考文献②

- Korthagen, FAJ., & Vassalos, A. (2010).Going to the core: Deepening reflection by connecting the person to the profession. (Ed.) Lyons, N. *Handbook of reflection and reflective inquiry.* New York: Springer
- コルトハーヘン著，武田信子監訳．(2010).『教師教育学：理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ』．学文社
- 佐伯胖.(2003).「文化的実践への参加としての学習」.佐伯胖，藤田英典，佐藤学.『学びへの誘い』東京大学出版会.pp.1-48.
- 佐藤郡衛，横田雅弘，吉谷武志.(2006).「異文化間教育における実践性」異文化間教育学会編.『異文化間教育』23号．アカデミア出版会．pp.20-36
- Shumer, R. (2009). Connecting character, service and experiential education: a recipe for effective youth development. (Eds.) K.C. Goh., V. D'Rozario, A.C.T., Heong, C.H. Mun. *Character development through service and experimental learning.* Singapore: Prentice Hall

ご清聴ありがとうございました。